



黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.58

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

農地を守り生かす

地元局のラジオが響く山あいのハウスで、母と2人スナツプエンドウの手入れをする鈴木敬一さん。スナツプエンドウはJ A園芸課の職員に勧められ、空きハウスの活用として2016年に導入した。

高校卒業後、工場の従業員や大型トラックの運転手として勤務するうち、家の農地を守り生かしたいと思うようになった。近所のキュウリ農家にも背中を押され、14年に就農を決意。幼い頃からキュウリを栽培する父の姿を見ていたこともあり、栽培品目にはキュウリを選んだ。両親と作業する計画で本数を決めスタートしたものの、出荷を始めてすぐ父が他界。想定以上の作業に追われ、就農1年目ということもあって思うように進まず、課題を多く残す初年度となった。

生産者としての成長

課題の一つが水管理だった。課題の一つが水管理だった。毎日800本の苗に株元灌水かんすいを行うと2時間半かかる。灌水にかかっていた時間をほかの作業に使えるようにと、2年目に点滴灌水を導入。防除などの時間を確保することができ、結果良品質のキュウリの栽培につながった。

現在では面積を11畝に拡大し、900本を栽培する。部会の栽培指導会へ積極的に参加するだけでなく、町内のキュウリ農家へ出向き教えてもらうことも多い。今まで培ってきた栽培技術を惜しげもなく教えてくれる仲間のおかげで、生産者として成長できた実感している。

地域への恩返しを

「父が他界し、地域の農家に助けられてここまでやってこられた」と就農当時を思い出し、感謝を口にする敬一さん。仲間同士のコミュニケーションに生産意欲を高められ、張り合いを

もらい、そして助けられたと感じている。今年、きゅうり部会の副部長と東部支部長に選任され、「産地確立に向け、栽培者の拡大を目指して取り組んでいきたい」と抱負を語る。「キュウリ栽培は、品種の選定や栽培方法の工夫によって作業を軽減することもできる、取り組みやすい品目だと知ってもらいたい」。新たな役目を担い、後継者の確保と育成にも力を注いでいく。

——キュウリ栽培を通じて、地域への感謝の気持ちを形にしていく。



私の一品

ガンダムのプラモデル

プラモデルのパーツが細かく、集中して無心で作ります。良い気分転換になります。

PROFILE

鈴木 敬一さん (49)

Keiichi Suzuki

東山町長坂

1969年千葉市生まれ、小学校入学を機に父の実家のある東山町長坂に転居。高校卒業後、地元の工場や大型運転手として勤務した後、2014年に就農。現在水稲30畝、キュウリ11畝、スナップエンドウ1畝を栽培。母と2人暮らし。

キュウリ栽培を盛り上げたい

東山町長坂 鈴木 敬一さん